

はり、早世す。次男正長、後に覺右衛門と稱し、寛永以來利常卿に奉仕して殊に恩顧に預り、度々加恩を賜はりて登庸せられ、遂に家祿二千石に至り、與力士二百石の附屬を命ぜらる。利常卿薨逝の後、參議中將綱紀卿の恩顧に與り、萬治二年小將頭と成り、足輕頭兼勤を命ぜられ、寛文二年之を免ぜられしに、延寶五年再び小將頭を命ぜられ、同年馬廻組頭に昇進し、貞享四年致仕し、老名をば夕庵と稱し、養老料二百石を賜はり、元祿七年五月歿す。利常卿の時、御局の女を娶り妻となして、男女子を生み、嗣子甚左衛門將興家を繼ぎたり。將興の長男覺右衛門貞正は、正長遺知の内千五百石を賜はり、その内二百石を與力知とす。二男縫殿正統、正長の遺知の内五百石賜はり、後百五十石加恩、六百五十石を拜領し、父子兄弟共に權要の職務を勤め、各馬廻頭迄昇進せり。思ふに、覺右衛門正長は、萬治二年に小將頭と成り、延寶五年に馬廻頭に昇進し、七十五歳にて致仕し、八十二歳の壽齡を保てり。長男甚左衛門將興は、元祿十年に小將頭と成り、同十六年に馬廻頭に昇進し、寶永三年に歿せり。將興の子二人あり。長男覺右衛門貞正は、

寶曆元年留守居物頭と成り、同六年に馬廻頭に昇進し、明和二年に七十七歳にて歿せり。其の弟治兵衛正統は、別家して延享四年に組頭並と成り、二百五十石の加恩を賜はり、同年馬廻頭に昇進し、後致仕して香山と稱し、明和七年七十七歳にて歿す。其の子幸左衛門正始家を繼ぎ、天明四年金澤町奉行と成り、寛政二年に馬廻頭に昇進し、享和三年に定番頭と成り、文化七年に算用場奉行を兼帯せり。此の後々も子孫馬廻頭等に至れるもの多し。舊藩中は藩政の職務多き中にも、小姓頭、馬廻頭、定番頭は、實に權要の職務にて、人々殊に之を規模とせり。然るに祖先正長以來、歴世父子兄弟その推舉に與り、權要の職務を勤め、殊さら世々七、八十歳の長壽を保てるは、誠に藩士中に稀なりといふべし。

○新堅町名願寺

東方眞宗道場也。由來舊に、攝津の人楠正房と云ふ人の長男房之助と云ふ者出家と成り、慶順と改稱し、文祿元年金澤河原町に於て創立し、寺號を名願寺と稱し、天台宗の寺院なりしを、翌二年改宗して、本願寺派の道場とすとあり。

○大槻内藏允傳話

名願寺は、大槻内藏允の旦那寺にて、今寺内の鐘樓堂なる鐘は、大槻が寄附なりと云ひ傳へたり。寺僧の舊傳に云ふ。内藏允が養父大槻長兵衛は、割場附足輕にて、長兵衛が宅は新堅町のうしろなる町附足輕組屋敷の邊なり。内藏允も此の宅にて出生すと。長兵衛は名願寺の門徒なりし故に、内藏允盛運の頃は、名願寺は檀那寺として殊更取立て、堂宇の修繕はさらなり、釣鐘以下種々寄附の物多く、合力米も過分に付け置きたりとぞ。然るに寛延元年、内藏允五ヶ山の禁錮中に自害しけるに、重罪の者なるに依りて死骸をば五ヶ山より引寄せられ、鹽詰になし、門徒寺の緣故を以て名願寺へ預けられ、本堂の下へ埋込まれ、今に其の儘なりと。内藏允は重罪の者なるがゆゑに、永く寺へ御預けの譯にて、如此被仰付たるなりと云ひ傳へたり。一説には、内藏允は木町の即願寺の門徒なり。内藏允が父長兵衛死にたる時、母の院號を望むよし彼の寺へ申入れけるに、一向宗には院號は甚だやかましく容易からぬ事也。殊に院號は院家寺ならでは付けがたきよし申立てたり。内藏允此の事を

聞き、安からぬ事なりと思ひ、其の後内藏允夥多の銀子を出し、本山東本願寺へ申立てさせ、官銀を指遣して即願寺を院家となし、さて母の院號をば付け貰ひたりと。一説には、内藏允より直に本願寺へ引合ひにおよび、即願寺を院家となしたりとも云ひ傳へたり。但し名願寺の傳説儘かなりといへれば、木町即願寺の事は誤聞ならんかともいへり。又名願寺に、そのかみ内藏允が寄附せし打敷或は佛器・佛具の類多くありしかど、寶曆九年四月の火災に悉く焼失して、今に存在せるものは釣鐘のみなりと云ひ傳へたりと。但し死骸の事は實事か、記録等に未だ所見なし。思ふに、弘化元年七月藩士組外中村準作と云ふ者、爲似切手を以て小拂所の銀子を多く取出せる事露顯し、一類預けに成り、禁番被命處、同年十月自宅に於て夫婦共自害す。于時右夫婦を鹽詰に成し、詮議中自宅に於て禁番を付け、翌年盆後までも如此、漸く落着する也。大槻内藏允も如此なりしと聞ゆ。

○山田屋小路

此の小路の角家に、山田屋某といへる魚店ありて、數代こ